

# 国体のリハーサル

## 貴重な経験を残した

### 全国教職員剣道大会

明年、栃木県で開かれる「栃木国体」で、日光は「山岳」と「剣道」の二種目が行われますが、そのリハーサル大会ともいえるべき「第二十一回全国教職員剣道大会」  
体育館での競技



が八月十日、日光市体育館で開かれました。

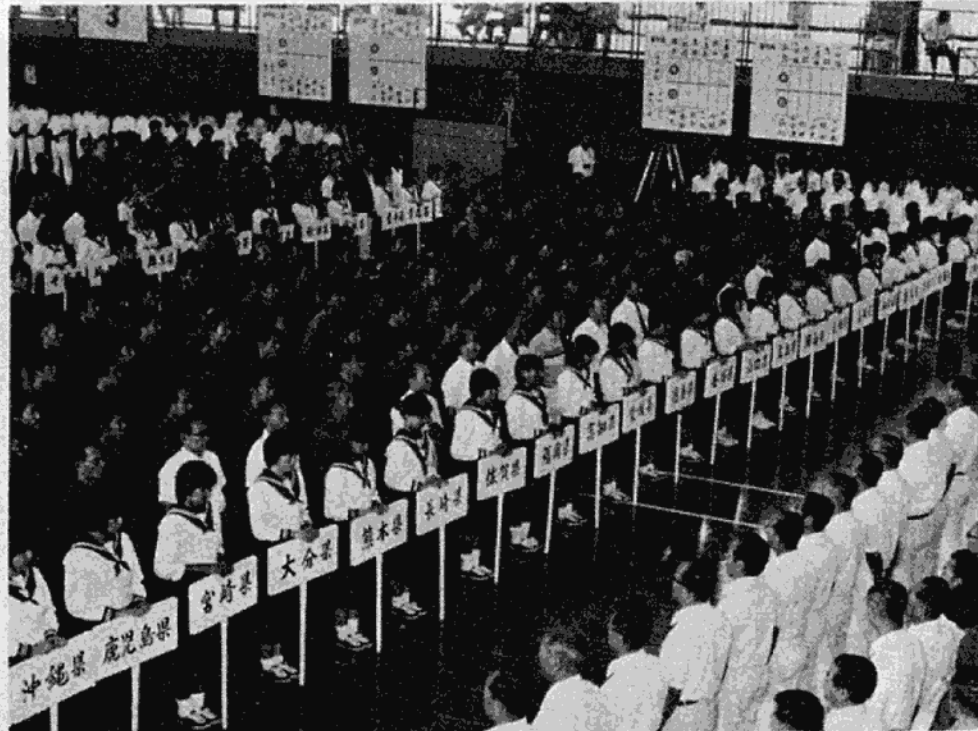
同体育館が、竣工後、全館を使用して開かれる大会はこれが最初で、すべてが未経験のことばかりでしたが、大会の運営は順調に進み、大会を盛りあげました。

開会式は、定刻の七時十五分から選手三百八十人、役員百八十人が入場、開会宣言や優勝旗の返還、各役員のあいさつの後、選手代表

の宣誓があり、開会式を終わりました。

開会式につづいて、特別演技として、栃木県学校剣道連盟会長の小竹敏夫氏と野口静夫氏による「日本剣道形」と全日本学校剣道連盟会長の野田孝氏による「居合」が披露されました。

競技は、個人戦・団体戦の各試合が行われ、体育館では四コートを使用、一部（小学校教員の部）



開会式



閉会式で市長のメダル授与

が東中学校の体育館を使用して、八時半から夕刻まで熱戦をくりひろげました。

NHKテレビで全国に生中継された団体戦決勝では、栃木県が三対二の接戦の末勝ち、二年連続三度目の全国優勝を果たしました。

五時半からは閉会式が行われ、六時には大会日程のすべてを終了。大会は一日だけのものでしたが、大会前三日間にわたる「学校剣道指導者研修会」を含めて、大会運営に当たった関係者には、貴重な経験を残した意義深い大会でした。

八月三十日には、この大会の反省会が関係者によって開かれ、持ち寄った反省点を改善して、来年の国体に備えることにしています。

かる「慈雲寺」という名刹があり、慈眼大師の尊像を本尊とし、万霊回向のために左右に八尺余りの位牌が安置してあった。

晃海は、この淵に七尺余りの不動明王の石像を造立し、淵の名を「慈救呪」最後の句の「カシマン」を取り、憾満が淵と名付けたという。不動明王の下、岩の中央部に「カシマン」の梵字を、修学院五世の山順僧正が彫りつけていて、弘法の投筆などと呼ばれる。

対岸の岩上には、護摩堂、霊庇閣を建てた。また、慈眼大師の門弟を始め、有縁の僧俗が、過去万霊自己菩提のために親地蔵と石地蔵約百体を彫刻し「並地蔵」とした。その数が、何度数えても合わないのが、後に「化地蔵」とも呼ばれたが、抜苦与楽の地蔵というのがなまったという説もある。

明治三十五年の水害で、この地が大被害に逢って親地蔵と並地蔵いくつかが流失、慈雲寺も廃絶して、この霊地も荒廃するまでであった。

近年、この地の復興をはかり、慈雲寺本堂や霊庇閣が再建され、また隣接地にストロークパークが建設されるなど、住年の霊地は、すっかりよみがえりつつある。